文論失語症論争について（一）

――論争の文脈――

宮尾正樹

はじめに

一九九〇年代以降、さまざまな場で「失語症」という語が使われるのを目にする。ある状態を病気にたとえて表現することは普遍的に行われることではあろう。失語症に限って、そして日本語に限って言うなら、問題に直面して沈黙することを「失語症に陥る」と表現しても、さほど理解困難ではない。試しにGoogleで失語症を検索すれば、以下のような例もヒットする。

私の言葉と彼の言葉が近くまで接近したかと思うとすぐにそれは引き離される。悪夢に近い格闘。私は失語症におちいる。そういえば私の失語症はもう一年以上も続いているなと思の私は恐怖する。得体の知れない恐怖。[1]

若い左翼運動が壊滅している地方都市に身を置いていると、ぼくのような若い左翼は失語症に陥ってしまう。[2]

ネオリベラルの見方は、市場だけでは社会を存続させることが出来ないということ、また、社会が崩壊し

たり、失語症的状態に陥るのを防ぎたいのならば、一般的に受け入れられる最小限の規範や構造が必要であるというような、我々が本能的に知っている事柄と矛盾する。(3)

最後の例はドイツ語からの翻訳であり、おそらく欧米の言語においても同種の比喩は成立する、というよりも、起源はそちらにあるのであろう。だが、そのような比喩の使われ方には、少なくとも日本語と比べて、中国語には際だった特徴があるように思われる。(4) 具体的な資料がなく、印象を述べるしかないのだが、比喩的な用法が日本語よりもはるかに多い。インターネットで検索すると、日本語のサイトが、上に挙げたような例が散見はするものの、圧倒的多数が本当の失語症について言及するものであるのに対して、中国語のサイトでは、比喩的な用法がきわめて多数に上る。本稿では、「失語症」が九〇年代以降の中国においてどのように用いられているかを概観し、「失語症」か否かをめぐって集中的に議論が交わされた「文論失語症」論争について整理を試みるものである。

一　中国における失語症

失語症と現在ならば診断される病あるいは症状は古代中国においても、漢代の作と伝えられる『黄帝内経』から、「中風失音」「中風卒不得語」「舌大不能言語」などの表現で記述されてきた。言語の障害は脳血管の疾病と密接な関係があるとみなされ、脳卒中などで右半身が麻痺すると言語能力が失われることも知られていた。清末の医学書『医学摘粋』（一八九五）には、

中風で話せなくなったものの病は神明にある。神明が病めば音は出せても話すことはできない。音は肺から出るが、神明は心にある。音は空気によって出るが、言葉は神明より発する。

とあるそうである。神明とは意識とか精神を現在ならば指すものらしい。中国医学の書物には言語障害の症状の具体的な記述は少ないが、およそ音声障害、失語症、構音障害と分類されるものが含まれるという。[5]

西洋の近代医学を受容するようになると、十九世紀後半より始まった西洋における失語症研究の成果も紹介されるようになり、一九三〇年代には中国における症例報告も現れる。だが研究がさかんになるのは一九八〇年代後半以降である。[6] 失語症の症状の現れ方は言語の性質によって異なり、[7] それはそれぞれの言語のあり方に基づくと予想されるが、[8] 中国語の失語症についての研究は九〇年代半ばまではきわめて少なく、[9] 本格的な研究が多く現れるのは九〇年代後半以降になってからである。[10] この間、医学や精神科学の分野を超えて、他分野とりわけ言語学の分野で失語症が取り上げられるようになるが、それには八〇年代初めのヤコブソン紹介が大きく関わっているだろうと想像される。[11] 社会言説の中で「失語症」の語がいつ頃から、どのように使われてきたかについては、今回は調査が及ばなかったので、今後の課題としたいが、[12] メタファーとメトニミーを相似性／隣接性の対立においてとらえるにあたって、ヤコブソンが相似性障害と隣接性障害という失語症の二つのタイプを参照したことが、中国の社会的文化的言説の中に「失語症」という語が頻出する刺激ともなったであろうという予想は立つ。学術雑誌だけをとっても、精密な数字とは言えないが、CNKIで「失語症」を全文検索（文史哲分野）してみると、一九八一年から八五年が五二編、八六年から九〇年が九七編、九一年から九五年が二〇六編、九六年から二〇〇〇年が五三四編、二〇〇〇年から〇五年が一、一七七編ヒットする。一貫して増加の傾向にはあるが、九〇年代以降増加率が増大している。

インターネットで見られた用例をいくつか挙げてみよう。

（一）今では、中国の農民が言葉を失っている（「失語」）ことはすでに周知の事実である。追加の徴収があっ

ても声を上げず、汚職があっても声を上げず、治安が悪化しても声を上げず、農村の道徳水準が下がっても、血液からエイズにかかっても、娘を誘拐されも声を上げない。（略）この社会の大転換期にあたり、知識界がしなければならないことはたった一つかもしれない。農民たちが失語状態を抜け出して、自分のことばで自らの自治を組織するのを助けること。[13]

（二）（ヘビメタからパンク、オルタナティブまで）こうした西洋音楽に対する明らかな複製と模倣はすでに極限まで来ている。国内の有名なロック・バンドを例にとると、ギター、ベース、ドラムは国内一流の名手で、センスも演奏も徹底的に西洋化しているが、ボーカルが口を開いたとたん、歌声と楽器の違いがあらわになる。ボーカルが余計なのだ！中国のロックも「失語症」を病んでいる！ここにおいて問題は、楽器や技術は複製し模倣することができるが、肉体の声は模倣することができないということだ。我々が中国語を使うよう運命づけられているならば、中国のロックは再創造されなければならない、現実、生活、感情、芸術に基づいた創造だ。[14]

（三）今でも、中国建築が「木構造で大空間大容量の近代化に適応できない」などとしゃべり散らす者がいる。そして大量の「近代建築」が雨後の筍のようにそびえ、地平線は高さも形も不揃いの屋根にでたらめに切り裂かれている。中国建築の美しい「大屋根」は失語症に陥り、「話語権」を失っている。[15]

（四）私がここで言う（中国医学の）学術失語症とは、中国医学の学術用語が晦渋で、一般民衆であろうと科学技術者であろうと、理解困難で使いたがらず、その結果、中国医学の学術用語が民衆あるいは科学技術者の中で意味が混乱し、中国医学とその他の学術体系の間に矛盾衝突が起こり、中国医学の「話語権」が失われ、中国医学は多くの場合、他の学問の学術用語で中国医学自身の学術理論を説明しなければならなくなっ

たことを言う。[16]

（一）はさまざまな搾取や圧迫に対して抗議や告発の声を上げてしかるべき農民が発言しないこと、（二）は中国のロック音楽が西洋の音楽を模倣した結果自らの肉声を発することができないこと、（三）は本来近代都市計画、近代技術にも対応できるはずの中国式建築法が西洋一辺倒の誤った風潮のために不当に忘れ去られようとしていること、（四）は中国医学がそれ自体の用語体系のむずかしさのために、他の学問の用語体系を参照し、それに依拠することでしか自らを説明できなくなっていることを「失語症」あるいは「失語」と表現している。（一）と同様に、女性、出稼ぎ労働者など、社会的弱者、文化の周縁にある者（と少なくとも意識されている者）の沈黙についても当然のように用例がある。

（二）（三）（四）は新と旧（現代と伝統）、そして中国と西洋の対立の構図の中でとらえられるという点ではよく似ている。だが少し詳しく見ると、この三者は必ずしも同じ構図だとは言えない。

（二）においては、現代というか八〇年代以前の、つまり「旧」に属するロック音楽は存在しない。ロックはその起源からして、中国における始まりは複製、模倣でしかあり得ないことは少なくともこの文章の当事者の間では了解されている。ここで持って回った言い方をするのは、ロックを大衆（的な）音楽という括りでとらえれば、三〇年代の歌曲、五〇年代の革命歌謡、ロシア民謡など、ロックと新旧の対立においてとらえられうるものが存在するからである。実際、テレビ番組などで、ノスタルジックにこれらの音楽が回顧される時、それらはたとえ西洋起源の旋律であっても、歌う側、聞く側においては十分に土着的なものとしてとらえられているだろう。この文章ではそれらの音楽は視野にはいっておらず、失語に陥っているもののオリジナルな姿は中国にはない。

（三）では、著者にとって守られるべきものは伝統的な建築、それを脅かし都市の景観を破壊するのは西洋建築

の現代的なビルである。ここでも注釈が必要で、一つには中国的建築法が鉄筋などの現代的建築材料による超大型建築にも適用可能だと考えていること、そしてもう一つは、ここでいう「中国建築」とは古代の木造建築だけでなく、二〇世紀に建築された広州の中山紀念堂、重慶の人民大会堂、北京の民族文化宮などが含まれていることである。

（四）において問題にされるのは、中国医学自体というよりも、その中国現代社会における解釈あるいは翻訳の困難、というよりもそれが他者、ここでは西洋医学をはじめとする近代科学のことばによって翻訳解釈されることによってしか伝わらないことである。中国医学の有効性、優越性は疑われていない。それ自体の言語で伝えられないことに対する苛立ちが「失語症」という言葉に表現されているのだが、病としての失語症からはだいぶ遠ざかって用いられていると言うことができるだろう。

ここに挙げた例も含めて、「失語症」をめぐる言説の中に非常に頻繁に登場する言葉がある。「話語権」である。日本では「言説の覇権」とか「言説権力」というような表現で、人文社会科学の範囲でしかお目にかかることがないだろうこの言葉は「失語症」以上に社会に流布している一種の流行語と言ってよい。ここでは仮に言説権と訳しておく。ある定義によれば、

機能から見れば、言説と権力は密接に関連しており、言説の持つ強制的で排他的な影響力がすなわち「言説権〔話語権〕」であり、言説権の作用力が言説の外在システムを構成する。言説権は社会生活のレベルと知識の体系に基礎を置くが、その権力の作用はより広範な範囲に及び、およそ普遍性を追求するものはみな一種の権力実践を構成する。権力は個人と集団、人間と社会文化、風俗習慣、各種の規則との関係、及び人間がこの関係のネットワークの中でコントロールされる度合いに表現される。それゆえ、言説権は「監視と処

罰」の形式を通じて、権力自身を社会の隅々に浸透する「普遍的な力」へと変える。[17]

M・フーコーを起源とするこの言葉はこの定義にあるように、言説の「権力」を指すはずの言葉だが、中国では同時に言説の「権利」、平たく言えば物を言う権利の意味でも使われる。というよりも、メディアにおいてはむしろ後者の用法の方が多いだろう。[18]

（言説権とは）公民がメディアを運用して国家や社会に関する事柄、各種の社会現象に対して意見を発表する権力を指す。広義には、言説権は報道の自由の権力の重要な構成要素であり、報道の自由の内の「表現権」の一部に属し、奪われてはならない公民の民主的権利である。[19]

フーコー的に権力が言説を作り出し、言説が権力となるという相互関係が出発点であるとすれば、この文章の議論はどこか逆立ちしているようであるが、それは国家権力と対峙しうる公共圏、あるいは市民の権利などの概念と混淆しながら、八〇年代以降の言説が作り上げられていったことを物語るようでもある。いずれにせよ、「話語権」の流行は重要な現象であり、その受容と変容を跡づける必要があるだろう。

本題に直接関係のない用例についてくだくだしく述べたのは、中国文論の失語症に関わる論争においても、実は今述べたようなさまざまな論点、見方が錯綜しており、その姿を見えにくくしているためである。[20]

二　文芸界における「失語症」

一九九〇年第二期の『文学評論』に黄浩「文学失語症――新小説『語言革命』批判」が掲載された。副題にあるように、八〇年代、特にその後半の小説創作におけるさまざまな言語表現的実験を批判したものだが、黄浩は八〇年代後半の新しい小説の傾向に対して、「創新意義」があると前置きはしつつも、

だが、人々が「読んでもわからない」という非難の後、次々と態度を変えて、新小説を賞賛するようになって、新小説が大得意になっていた時、批評が「テクストに帰れ」「言語に帰れ」と大声で叫んだ時、人々は新小説がその創作現象を通じて我々に発していたシグナルに気づくことはなかった。新小説の一見頑強そうな身体にはすでに病気が蔓延し始めていたのだ。その中でも、新小説にとって（実は文学にとってでもある）最も恐ろしく致命的なものは失語症であった。

と断じ、新小説が罹っているのは言語表現が困難な運動性失語症であるとして、王蒙、方方、黒孩などの小説から具体的な例を引きながら、過剰なおしゃべり、異常な文法構造、とりとめのない無意識の表出、行き過ぎた省略をその症状として挙げた。それに対して、論文に自らの文章を引用された唐躍、譚学純は、黄が自分たちの文章を曲解して、恣意的な引用を行っている、新小説の作家、作品の選択が杜撰で、極端な例や明らかな失敗作を新小説一般の現象として取り上げている、などと批判を行った。[21] このやりとりはその後新たな論争に発展することはなかった。

タイトルからして、「失語症」問題と関係がありそうに見えながら、先に挙げたような用法、あるいはこれから見ようとする文論失語症の議論とはこの応酬は別の文脈にあると言ってよいだろう。批判側の文章には「失語症」という表現がほとんど（タイトルの引用以外に）現れないし、そもそも黄の文章自体、失語症という言葉は、わざわざ運動性失語症、すなわち言語の受容理解ではなく、表現面における失語症として用いながら、文中で述べているのは、言葉で表せない苦しみではなく、新小説作家たちの言葉を理解できない苛立ちからくる難詰であり、使わなくともすむところに「失語症」と名付けるあたりにかすかに連関を感じさせなくもないとはいえ、語るべき言葉／権利（力）を持たないサバルタン的状況とは無縁のものである。つまりこの応酬があった九〇年（黄の

文章は八九年秋の執筆）においては、『文学評論』という全国的学問メディアにおいても、失語症という言葉は先に見たようなコノテーションを持つものではなかったことを物語っている。

九〇年代に入ると、言葉あるいは言説権の喪失の意味合いで失語症が大量に用いられるようになる。数字を示すことはできないが、先に挙げた雑誌のデータで、九〇年代以降増加するものの多くがそうであろうと思われる。一つ例を挙げてみる。

映画の生産方式において、もっとも活力のある生産力要素である生産者が映画生産に最も重要な作用を果たす。国外（原文は「境外」で香港、台湾も含むそうである）資本が大量に中国の映画市場に投資されるため、中国映画の主要なスタッフは物質分配関係の国内との大きな格差ゆえに当然外資に雇われる。それは国内映画にとっての人材流失、芸術の創造力減衰を招くだけでなく、投資会社の制約を受ける中国の映画芸術家は一種の「失語」状態に落ち込んでいく。なぜなら、どんな投資者も明白な商業的動機と隠れたイデオロギー的背景を持ち、そのような状況下では、中国の映画工作者自身の文化言語と芸術言語は経済的、文化的に二重に解消されざるを得ないからである。[22]

注目すべきは、一九九四年の一月に北京大学比較文学研究所で行われた「平行研究と言説構築に関する討論会」である。この討論会の模様を記した文章によると、会が企画されたのは、張隆溪が一九九二年に発表した英文の著作 *The Tao and the Logos: Literary Hermlmeutics, East and West* で、[23] 中国の伝統的文論における言語理解と解釈の問題を解釈学的な認知体系に整理し、その書評を盛寧が『読書』で行い、平行研究（対比研究）における言説構築の問題を論じたことに端を発したものだという。[24] 楽黛雲、張頤武ら国内の研究者の他、海外からの参加者もあったようだ。討論会では、「中国と欧米の間で詩学のトランス・カルチャー的対話を行うにあたって、お互いに理解

し合うことばをどのように見つけることができるのか、新しい言説はどのように形成されるのか、既知のローカルな文化概念で外来の異質な文化を解釈するのか、それともその文化のオリジナルな論述を別の文化の『認知システム』に整理するのか」が活発に議論されたという。

今回取り上げようとする中国文論失語症論争の前史としてこの討論会を見ると、二つの点が重要である。一つは、「文化的失語」という表現を用いた参加者がいたこと、もう一つはこの討論会における論点がすでに文論失語症論争の結論を先取りしていることである。いわばこの論争は行われる必要のなかったものとも言える。そこで私たちの関心は、論争の中身の検討もさることながら、なぜ論争が起こり、しかもさまざまな分野の人間を巻き込んでにぎやかに議論が行われたのか、その社会文化的な意味に向かうことになる。

まず一つ目の点である。討論会において「文化的失語」について語ったのは、台湾から参加した王崇敬であった。王は台湾の文化状況を説明した。台湾の理論界は完全に欧米化しており、自らの母語を失った状況にある。そのような深い「文化的失語」状況にあっては中華文明の本源状態を回復することは困難である。王の発言の意図は、その困難を乗り越えるのに比較文学の方法が大いに役立つだろうと述べることにあったのだが、本論のテーマから見れば、これまで見たように、九〇年代以降においては、文論失語症論争も含めて、失語症は文化的ヘゲモニーあるいは文化的アイデンティティの喪失の問題として立ち現れるのであり、戦後（さしあたっては、と言った方がよいかもしれないが）政治的には植民地以後でありながら、文化的にはアメリカの圧倒的な影響下にあった、まさにポスト・コロニアルな状況を先行して経験した台湾の研究者が「失語（症）」と表現したことが当然とはいえ（あるいは偶然とはいえ）興味深い。

王の発言に対して、他の参加者から、「文化的失語」という問題の立て方に対する疑問、すなわち「失語」ある

いは「周縁」というとらえ方自体が一種の錯覚ではないのかという疑問が出されたという。それも含めて、討論会では後の文論失語症論争で現れるのとよく似た発言がなされた。楽黛雲は張隆溪の著書の重要性を認めつつ、この特殊な歴史的文脈において、詩学の対話が欧米の言説体系のみによってなされ、それによってローカルな文化が測られるとしたら、その基準に合わないものが排除される可能性があり、同時に、まったく外来のものに染まらないローカルな枠を求めるのは不可能であり、我々は伝統から離れることも欧米から離れることもできないのだと述べた。張頤武は、詩学の対話の言説構築において困惑を感じる原因は「本源」を求める願望が強く、それが実際には見つかることのないものだからであり、我々は新しい位置をみつけなければならず、その位置とは、「他者の他者」という言葉で概括することができると述べた。文論失語症論争においては、中国の文論が失語状態にあるのか否か、あるとすれば回復されるべきことばはどこにあるのか、ことばはいつから失われたのか、が主要な分岐点となるが、前の二つについてすでにこの討論会で問題が提起され、論争というものが大方そうであるように、論争に決着はつかないのだが、論争から一〇年以上を経た現在振り返って、「落としどころ」としてありえたであろう答えがここにあるように思われる。

さて、ようやく中国文論失語症論争にたどり着くが、ここで、一九九四年から二〇〇三年まで、文論失語症も含めて、文化的失語症に関わる文章の主なリストを挙げておく。○を付したものが文論失語症に関わるものである。(25)

賈磊磊「電影的生存、生産及其審査」『当代電影』一九九四年第一期

王宇根「『世紀末』的文化境遇与我們的出路」『国外文学』一九九四年第二期、『文芸争鳴』一九九四年第二期

王徳勝「疏離与承諾――対当今中国文芸的一種文化批評嘗試」『天津社会科学』一九九四年第三期
邵建「『精神失語』及其文化批判」『文芸評論』一九九四年第六期
胡全生「女権主義批評与『失語症』」『外国文学評論』一九九五年第二期
毛丹青「失語症的哲学思考」『東方論壇』一九九五年第三期
李広倉「新時期中国作家的両種文化策略」『理論与創作』一九九五年第五期
鄒忠民「歴史的失語症――『文革』題材創作論」『小説評論』一九九五年第五期
○曹順慶「二一世紀中国文化発展戦略与重建中国文論話語」『東方叢刊』一九九五年第三期
李皖「揺滚楽的失語症」『天涯』一九九六年第一期
○曹順慶「文論失語症与文化病態」『文芸争鳴』一九九六年第二期
○曹順慶、李思屈「重建中国文論話語的基本路径及其方法」『文芸研究』一九九六年第二期
○張少康「走歴史必由之路――論以古代文論為母体建設当代文芸学」『文学評論』一九九七年第二期
○陳洪、沈立言「也談中国文論的『失語』与『話語重建』」『文学評論』一九九七年第三期
○蔡鐘翔「古代文論与当代文芸学建設」『文学評論』一九九七年第五期
○蔣述卓「論当代文論与中国古代文論的融合」『文学評論』一九九七年第五期
○張衛東「回到語境」『文芸評論』一九九七年第六期
○李清良「如何返回自己的話語家園」『文芸争鳴』一九九八年第三期
○王志耕「『話語重建』与伝統選択」『文学評論』一九九八年第四期
○蔣寅「文学医院：『失語症』診断」『粤海風』一九九八年第九～十期

○羅宗強「古文論研究雑識」『文芸研究』一九九九年第三期
○曹順慶「従『失語症』、『話語重建』到『異質性』」『文芸研究』一九九九年第四期
○「『失語論』的迷誤」『文芸理論研究』二〇〇〇年第一期
○姚建斌「従系統思惟看中国文論」『中国文学研究』二〇〇〇年第三期
高旭東「後殖民語境的東方文学選択――兼評当前詩学討論中的『失語症』論」『文史哲』二〇〇〇年第六期
姜山秀「失語与訴説」『婦女研究論叢』二〇〇一年第一期
○趙海「『拯救』与『逍遥』――中国文論的話語権力」『西南民族学院学報』二〇〇一年第四期
○王春雲「中国文学理論的失語与拯救」『南通師範学院学報（哲社版）』二〇〇一年第四期
○蕭薇、支宇「従『知識学』高度再論中国文論的『失語』与『重建』――兼及所謂『後殖民主義』批評論者」『社会科学研究』二〇〇一年第六期
李安「対『五四』新文化運動及当代中国『失語症』的思考」『喀什師範学院学報』二〇〇二年第一期
○熊六良「九〇年代文学理論熱点評述――『失語症』論的歴史錯位与理論迷誤」『文芸評論』二〇〇二年第四期
○葉世祥「『文論失語症』与後殖民主義」『温州師範学院学報』二〇〇二年第四期
張麗萍「語言的狂歓和失語症的流行」『皖西学院学報』二〇〇二年第六期
○熊六良「文論『失語症』――歴史的錯位与理論的迷誤」『理論与創作』二〇〇三年第一期、『中国比較文学』二〇〇三年第二期
劉小新「也談当代文学批評中的『失語』命題」『煙台師範学院学報（哲社版）』二〇〇三年第三期

○斉秋生「中国文論的『失語』与後殖民文化心態」『洛陽大学学報』二〇〇三年第三期
曹山柯「迷失・偏食・失語――対中国二〇世紀八〇年代～九〇年代文学的反思」『広東商学院学報』二〇〇三年第五期

一九九五年に曹順慶が「中国の近現代文化は基本的に欧米の理論言説を借用しており、自分自身の言説を持たない。あるいは自分自身に属する文化（哲学、文学理論、歴史理論などを含む）の表出、交流と解読の理論と方法を持たない」「失語症に罹った人間がどうして他人と対話できるだろう」「今日の文芸理論研究においてもっとも重大な問題は何か？私の答えはこうだ、文論失語症！」[26]と挑発的に（扇情的に）提起して始まった中国文論失語症に関する論争の経緯と問題点については、（二）で述べることとする。

注

（1）安里英子「批判としての対話―野村浩也『無意識の植民地主義』について」http://www5b.biglobe.ne.jp/~WHOYOU/nomurahiroya.htm
（2）http://www.warewaredan.com/contents/b96-3.html
（3）ミヒャエル・エールケ「第三の道とヨーロッパの社会民主主義」http://www.festokyo.com/dritterweg3.pdf
（4）中国語が特殊なのか、日本語が特殊なのかは本稿では問わない。疾病や障害の表現の忌避という（おそらく）現代日本語の、というより、言語のあり方に対する社会的な規範意識（政治的正しさ）を当然考慮に入れる必要があるだろう。
（5）王新徳「我国漢語失語症及其康復問題」『臨床実用神経疾病雑誌』第一巻第一期、一九九四年。
（6）王新徳前掲。

(7) 中国語の失語症の場合、音素の感知障害の面では英語の失語症と大差ないが、語の理解の面では多数の患者に理解障害があるのに対して、皮層下性の失語症患者にはこの現象がなく、英語の失語症と様相を異にするという。張慶蘇「失語症検査研究進展」『中国康復理論与実践』第一一巻第八期、二〇〇五年、参照。

(8) わかりやすい例としては、中国語の失読症においては、漢字を指でなぞるようにすると字音が出てきやすいとか、漢字の音は出せなくても意味はわかるといった現象が見られるという。王新徳前掲参照。また、漢字の要素とされる形、音、義のうち、形と音の結びつきがもっとも弱く障害を受けやすく、形と義の結びつきがもっとも強いことを各種の症例研究が支持しているという。梁丹丹「中国神経語言学的回顧与前瞻」『当代語言学』第四巻第二期、二〇〇四年、参照。

(9) 一九八八年から一九九六年の間に、失語症研究の論文は約二、六〇〇本に及ぶが、中国語の失語症に関連するものはわずか六本だという。葛紅「語言学神経語言学失語症」『山東外語教学』第八一期、二〇〇〇年、参照。

(10) 九〇年代以降の中国語失語症研究の概観については、梁潔他「漢語失語症研究綜述」『当代語言学』第六巻第二期、二〇〇四年、参照。

(11) 翻訳として、
雅可布遜『児童語言、失語症和語音普遍現象』伍鉄平訳、一九八一年。
紹介として、
岑麒祥「雅各布遜和他対語言学研究的貢献」『当代語言学』第二期、一九八三年。

(12) 『人民日報』のCD-ROMで検索すると、七〇年代まではほとんど「失語症」の語は登場しない。いずれも病名としての用例であり、比喩的な用例は見つからない。

(13) 「農民『失語症』的病史考察」(『三農中国』二〇〇四年春季巻より) http://www.xschina.org/show.php

(14) 呉虹飛「中国揺滚——大衆和個人的想像」http://cul.book.sina.com.cn/s/2003-01-22/26796.html

(15) 「現代建築・中国屋頂的失語症」http://www.visionunion.com/article.jsp

(16) 張毅「中医失語、中医体験路漫漫」http://www.dyjc.net/

(17) 金徳万他「西方当代『話語』原論」『西北師範大学学報』第五期、二〇〇六年。

(18) ここで権力と権利を明らかに違うものであるように感じる感じ方もまた、日本語、というよりも、たぶん権利というものが常に他者から与えられてきたあり方に規定されたナイーブな感覚であろうことは置いておく。

(19) 「公信力――互聯網発展的生命線」http://www.cctv.com.cn/tvguide/tvcomment/wtij/xzlz/7517_7.shtml

(20) もちろん魯迅の「声なき中国」（一九二七年）がすぐ思いつくように、言葉（声）を持たない（失った）という見方自体は昔からあるが、本稿では「失語（症）」という表現に限定している。

(21) 唐躍、譚学純「文学尚未失語――関於黄浩同志『文学失語症』一文的不同意見」『文学評論』一九九一年第一期。

(22) 賈磊磊「電影的生存、生産及其審査」『当代電影』一九九四年第一期。

(23) 原著はデューク大学出版社、一九九二年。中国語訳は『道与邏各斯』江蘇教育出版社、二〇〇六年。

(24) 王宇根「『世紀末』的文化境遇与我們的出路――北大比較文学研究所『平行研究』与『話語建構』討論会紀要」『国外文学』一九九四年第二期。

(25) 文論失語症に関する文章はそれ以降も現れるが、二〇〇三年で区切ったのは、次のように、二〇〇三年には提起者の曹順慶が少なくとも正面から応酬する舞台から降りてしまったからである。

「二〇〇三年の古代文論年会において、ある研究者が曹順慶教授に『失語症』問題についてたずねた。彼の答えは、あれは人々が文学理論の危機を重視するようにするための一つの戦略にすぎず、目的は既に達したというものであった。会場は騒然とし、何か馬鹿にされたような気持ちになった。」（蔣寅「対『失語症』的一点反思」『文学評論』二〇〇五年第二期）

(26) 前二つの引用は、曹順慶「二一世紀中国文化発展戦略与重建中国文論話語」『東方叢刊』一九九五年第三期、三つ目の引用は、曹順慶「文論失語症与文化病態」『文芸争鳴』一九九六年第二期。